

---

# 勝利の女神を喚び出せば

ナリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勝利の女神を喚び出せば

### 【Zマーク】

Z5856Z

### 【作者名】

ナリ

### 【あらすじ】

いきなり召喚されました。と思つたら失敗? .....え? 用無し?

召喚ファンタジーのような、おっさんとの恋愛話のよつな。(中編予定)

事の始まりはこいつだ。

上司から仕事の呼び出しを受け、急いで家を出た瞬間、ぐんと体が下に引っ張られるような感覚がした。  
そしてハツと気づいた時には、私は見知らぬ場所で、見知らぬ人々に囲まれていたのだ。

後で分かる事だけど、その時私はクロッカという國のお城の広間に召喚されていたらしい。周りにいる人々は、王様や大臣といった偉い人と、彼らを守る兵士たちだった。

「おお、本当に成功した」  
「召喚が成功したぞ！」

大臣っぽいお爺ちゃんたちが興奮気味にささやく。  
突然違う世界へ来て呆然としていた私だが、瞳だけはせわしなく動かして、自分の置かれた状況をなんとか把握しようとしていた。

私の足元には召喚陣らしきものが描かれており、正面を見上げれば、玉座に座つた王様がこっちを讶しげに見つめている。

「我らの呼びかけに、アプロディー様が応じて下さつた」

感動したように言つお爺ちゃんたちの言葉を、王様がさえぎる。

「待て。こんな小娘がアプロディー様とは思えん」

『小娘』だと?  
私はむつと顔をしかめた。

「おい、お前」

不遜な態度で王が言つ。まだ年も若く、金髪碧眼のイケメン王だけ、こちらを見下しているような口調や表情がいちいちカッコに触る。

人の性格というのは、結構しぐさや雰囲気に出るものだ。この王様からは高慢で自己中な匂いしかしない。

「お前は本当に”勝利の女神” アプローディー<sup>テ</sup>か?」

その質問に、私は目を丸くした。

勝利の女神アプローディー<sup>テ</sup>? .....え、誰が?

きょろきょろと周りを見回しても、広間の中心には私しかいない。王様の視線もしつかりとこちらに向けられていて……

私が勝利の女神? まさか!

「女神だなんてめつそうもない。私はそんな崇高な存在ではないです」

慌てて否定する。訳の分からぬまま召喚されたかと思えば、女神に間違われるなんて。

「お前はアプローディー<sup>テ</sup>ではない?」  
「はい、違います」

再度、王様から問われて、私は大きくなづいた。

すると今度は、彼の眉間に深いしわが刻まれる。片眉をつり上げて私の一番近くにいた中年のおじさんを睨みつけると、

「貴様、失敗したな？ ただの人間の小娘を召喚して、どうして戦争に勝てるというのだ。私は勝利の女神を呼び出せと言つたはずだ。隣国シロルとの戦争に勝てるように、勝利の女神を呼び出せとな」

冷たい口調で責めた。責められたおじさんは顔を青くしながら言う。

「し、しかし陛下……私も召喚術などとこゝものを使うのは初めての事ですし……」

彼の弱々しい言い訳を聞いていくと、どうやら召喚術というのは、この世界でも特にポピュラーな術ではないらしいという事が分かった。

なんでも最近見つかった五百年前の文献の中に『勝利の女神を呼び出して戦争に勝利した』といつ記述とともに、召喚のやり方が書いてあつたのだとか。

そしてそれを見た王様が、「やつてみせらる」と陛下のおじさんにムチャぶりしたようだ。そりや無理だよ。

尋常じゃない冷や汗を流しながら言い訳を続けるおじさんを見て、私は少なからず同情の念を覚えた。

召喚術なんて本当にできるかどうか分からぬものだったんだから、私を喚べただけでも褒めてしかるべきじゃないか。

ただのおじさんが召喚術使ったんだよ。すじこよ、このおじさんは。

しかしそこで、私はハツと我に返つた。

見知らぬおじさんに同情している場合ぢゃない。本当に可哀想なのは、その召喚に巻き込まれた私ではないか、と。

何だか急に怒りが込み上げてきて、思わず王様に「私を元の世界に帰してください」と詰め寄りつとした時だった。

「どうかお許しを、どうか……『やあやあああ…』」

野太い悲鳴が耳を突く。

真つ赤な血しぶきが、私の視界を汚した。

「失敗は失敗だ。使えぬ家来などいらん」

辛辣に吐き捨てる。私の目の前で、おじさんはすでに息絶えていた。

王様から命令を受けた兵士が、召喚に失敗したおじさんを容赦なく斬り捨てたのだ。

恐怖のあまり叫び出しそうになつたが、喉がつかえて声が出ない。体から血の氣が引いていく。

どうしよう。私、とんでもないところに来てしまった。ここは私がいた平和な世界とは違うのだ。

今更ながらそう実感して、細かく体が震え出した。

「さて、では、勝利の女神でもなんでもないお前をどうするか

玉座の王が氷のような瞳で私を見下ろし、言つた。

勝利の女神アプロティーテと間違われて召喚され、このクロッカ国にやつて来てから3ヶ月。  
私は一応、まだ生きてます。

私を呼び出したおじさんは殺されちゃったし、元の世界に帰ることもできないまま、お城の片隅でひっそりと日々を過ごしてきたのだ。

不遜な王様とは、あの時以来会っていない。会いたくもないけど。

うわさでは、王はもう召喚術で女神様を呼び出すのは諦めたようだつた。大昔の文献に載つていただけの不確かな術だつたし、それに時間をかけていられないと思つたんだろう。

まだ本格化していないとはいえ、このクロッカ国は今、隣国のシリルと戦争中なのだから。

「夕食をお持ちしました」

静かな声とともに扉が開く。料理の乗つたカートを押して、ひとりの侍女さんが部屋の中に入ってきた。

私はあの王様に殺されはしなかつたし、一応この城の中には置いてもらえているけれど、特別に良い待遇を受けているわけでもない。

私にあてがわれた部屋は城の中の一室だけあって広いものの、簡素なベッドとテーブル、椅子があるだけの寂しい部屋だった。北側にあるのか日が入らず、昼間も薄暗くて、ちょっと素敵な監獄みたいなのだ。

何度か挑戦してみたけれど、扉の外には見張りの兵士がついて逃げ出すこともできない。

私はため息をついて椅子に座り、テーブルに乗せられていく料理を眺めた。城で働く使用人たちの食事とほとんど変わらないと思われる、つつましいメニューだ。まあ、ごはん貰えるだけマシかな。

この城の人たちは、私の遭遇を考えあぐねているようだつた。“勝利の女神アプロディーテ”でないなら用はないけど、召喚術のことをペラペラ喋られても困るので、簡単に城の外に放り出す事もできないのだろう。

それに大臣などの偉い人の中には、『召喚術で出てきたのだから、やつぱり”勝利の女神”としての資質はあるのでは?』と期待している人もいるみたいだつた。

この3ヶ月で色々やらされたもんなー。

私に軍師としての才能もあると思ったのだろうか、地図を広げられて「どう戦つたら勝てるか」などと戦略を聞かれたり、戦に勝てるような方角や時期を占つてみると言われたり、あげくの果てには剣を持たされて、兵士たちの訓練に放り込まれたり。

だけど私には戦術の事はさっぱり分からぬし、占いだってできない。もちろん敵を百人も千人も斬つて、この国を勝利に導けるほどの剣術も体力も運動神経もない。

ここへ来るまで、私は平和な世界で戦争とはかけ離れた生活を送つていたのだから当たり前だ。

「大丈夫ですか?」

食事を運んできてくれた侍女 マリンさんが、うつむいていた私の顔をそつと覗き込んで言った。

心配をかけてはいけないと、私は笑顔を作る。

「大丈夫です、考え方してただけなので。ありがとう」「食事、全部召し上がりくださいね。体力をつけないと」

マリンさんは優しく言って、部屋を出ていった。私の世話をしてくれる侍女さんは3人いて、交代で食事の用意やら部屋の掃除やらをしてくれるのだが、マリンさんは何かと私のことを気にかけてくれる。

私が他の世界から間違つて召喚されたという事を知つていて、不憫に思つてくれているのだ。

ちなみに他の侍女さん2人は何だかツンとした雰囲気で、用事がある限りは話しかけてこない。

マリンさんがいてくれたおかげで、私はこの3ヶ月何とかやってこれた。彼女の優しさに触れていたから、見知らぬ土地で独りぼつちでも精神をまともに保ってきたのかも。

なんたつてこの城にいる人々は、あの独裁的な王様をはじめ、自分たちの保身に必死な大臣たちなど、自己中心的な人が多いから。私が会話した事あるのはこの城にいる一部の人だけだが、権力を持つている人ほど、性根の曲がった嫌な人が多かつた気がする。

そしてそんな腐った人たちの手に、私の命運も握られているのだ。薄味の食事を黙々と口に運びながら、どうにかしてここから逃げられないかと思案した。

よくも悪くも事態が動いたのは、それから1週間後の事だつた。昼食を食べた後、する事もなくぼーっとしていると、ノックも無くいきなり部屋の扉が開いた。ドカドカと床を踏み鳴らして入つてきたのは、王様と彼を守る近衛兵、そして大臣たちだ。

「な、なんですか？」

私は椅子から立ち上がり、身構えた。

最近毎日のように脱走しては見張りの兵士に見つかって連れ戻されてるから、いい加減、王様の方にも報告が上がったのかもしれない。

王様は尊大な態度で言つた。

「お前の処遇が決まつた」

その言葉に、私の背筋がひやりと凍る。

もうそろそろ来る頃だと思っていた。この3ヶ月で色々やらされて、私が勝利の女神でないことは裏づけられたから、正式に用無しになつたのだ。

そしてその用無しをいつまでも城に置いておくほど、この王様は甘くない。

「アプロディーテではないお前に、もはや存在価値はない。……これを受け取れ」

王のふところから取り出され、一いちょうに投げられたのは、紫の液体が入つたガラスの小瓶だつた。

「なんですか、これ？」

顔をしかめて言つ。

答えは何となく分かっていたけど。

王様はフツと口角をつり上げて笑つた。

「毒だ。それを飲んでさつさと死ね。言つておくが、これは私の慈悲だぞ。その毒はゆっくりと体に作用し、眠るように死んでいける。苦痛を伴わずにな」

手の中の毒薬が、ずんと重みを増した気がした。

王様は続ける。

「普通なら問答無用で斬り殺すところだが、お前は我々の呪縛に巻き込まれただけだしな。これくらいの情けはかけてやるのつかと思つたのだ」

田の前にいる王様が、どうしてこんなに横柄な態度をとつているのか分からぬ。

相手の事を責めて、許すか許さないかを決める権利を持つてるのは、私の方だと思っていたんだけど。

だつて呪縛なんて言つて、やつてることは誘拐と同じじゃないか。おまけにそれに対して謝罪もせずに、用が無いから死ねだなんて。こんな理不尽なことってない。

私はわざとゆっくりとした動きで、小瓶を握つた手を上げた。腕を伸ばし、王様に向かって拳を掲げる。

王様に大臣に兵士たち、この部屋にいる全員の視線を感じながら、私は握り込んでいた指を広げた。

「いんな毒は必要ありません。私、死ぬつもりなんてないの」

毒薬の入った小瓶は私の手から滑り落ちて石の床にぶつかり、パリンと高い音をたてて割れた。紫の液体がとろりと広がっていく。

王様は一瞬目を見開いた後、口元を引きつらせながら笑つて言った。

「そりが、毒は必要ないか」

と、そこでぐんと声を低くする。

「ならば痛みにうめいて死ね」

王様がぱちんと指を鳴らすと、隣に控えていた兵士のひとりが静かに歩み出てきた。腰の剣に手をかけて、私の方に近づいてくる。私がこの鍛えられた兵士に勝てるなんて思つていなか。だけどまだ死にたくないから、みつともなく抵抗してやる。

今まで誰かを殴つた事なんてない私だが、今は妙に闘志に燃えていた。アドレナリンが出てハイになつていてるのだろうか、あわよくば王様の顔面に1発ぶち込むぞ、と物騒な事まで考えていた。

すらりと剣を抜いた兵士を、ぎろりと睨み上げる。視界の端で王様がニヤニヤと笑つているのが気に触る。

私が動物だつたら、きっと今、毛を逆立たせてうなり声をあげているに違ひない。

おかしいな。私はこういう時、可愛く震えて涙をこぼすよつなキヤラだと自分で思つてたんだけど。

兵士が剣を振り上げて床を蹴る。私は目をつぶらなかつた。だつ

てそんな事したら、剣を避ける事ができなくなるじゃないか。

が、剣は私に届く前に止まってしまった。  
キンと高い音が部屋に響く。

「……！」

私は目を丸くして固まつた。  
だつて私と、私を襲おうとした兵士との間に、いきなり第3者が  
立ちはだかつたのだから。

「お嬢さん、意外と気が強いねえ」

私をかばつて剣を抜き、兵士の攻撃をやえざつたのは、

「ま。おじさん、そういう子好きだけど」

やけにのんびりとした空気をもとつた近衛兵のひとりだった。歳  
は30代後半くらいで、私にとつては確かにちょっとだけおじさん  
だ。

しかし今はそんな事どうでもいい。彼も他の兵士たちと同じく、  
王様側の人間のはず。

なのにどうして私をかばつたんだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5856z/>

---

勝利の女神を喚び出せば

2011年12月20日17時54分発行